中野重治論

詩と評論

木村幸雄

桜楓社版

木村　幸雄（きむら　ゆきお）

昭和8年（1933年），熊本県に生まれる。昭和35年（1960年）3月，東京教育大学文学部国語国文学科を卒業，同大大学院修士課程，博士課程で日本近代文学を専攻し，現在福島大学教育学部教授。論文に「『海に生くる人々』をめぐって」（『日本近代文学第16集／昭和47・5）「室生犀星」（『日本文学」昭和50・9）「抒情における風土と思想」（『文学」昭和51・6）「光太郎における〈欲望〉と〈自然〉」（『言語と文芸」昭和52・12），著書に『中野重治論 作家と作品』（桜楓社，昭和54・5）などがある。

現住所　960 福島市渡利平ケ森10　公務員住宅1—402

中野重治論　詩と評論

1979年6月15日／初版発行
1979年7月5日／二刷発行

定価 1800円

著　者／木村幸雄
発行者／及川篤二
発行社／株式会社桜　楓　社
東京都千代田区猿楽町2-8-13
電話／03-295-8771　振替東京6-18020

印刷所／共信社印刷所
製本所／辰文社宮崎
Printed in Japan／©Yukio Kimura 1979
1093-790639-0723

目　次

I

塵労の詩人……7
萩原朔太郎と中野重治……41
中野重治と伊藤整……84
——詩と風土——
『中野重治詩集』ノート……125

Ⅱ

『斎藤茂吉ノート』論 ……185
——「抽象的思惟行為」と肉体——
芸術観について……211
政治と文学……232
美意識の構図……252
文体の層……266
あとがき ……275

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

中野重治論

詩と評論

I

塵労の詩人

一

中野重治がはじめて発表した詩篇は、「塵労鈔」と題されていた。手もとの辞書をいくつかひいてみると、「塵労」は仏教用語として、「煩悩」という意味が出ている。しかし、中野重治の詩篇の題の意味はこれではあるまい。別のをひくと「塵事のほねをり、世の交際。」とあり、もう一つのには、「俗世間のわずらわしい骨折り。」とある。おそらく、「塵労鈔」の「塵労」の意味はこの方だろう。そういう意味でなら、「塵労鈔」という総題と、この総題のもとに発表された数篇の詩の世界との結びつきがよくわかってくる。いや、そればかりではない、中野重治は、これまでずっと作品においても、実生活においても、まさに「塵労の詩人」であったし、これからもなおそうでありつづけるのだろう、とつくづく思われてくる。辞書には、「塵労を払い捨てるため山中に籠る。」という用例があげられているが、おそらく中野重治の生涯にはそういうことはのぞめないのではなかろうか。むしろ、みずからすすんで塵労の中に腰をすえ、それとあらが

いつつ詩人として生きぬくところに中野重治の面目があるといえば、いえるのではなかろうか。大変しんどいことではあるが……。

去年亡くなった花田清輝に、「世の中に歎きあり」というエッセイがある。そのエッセイの題辞（エピグラフ）として、中野重治の「その人たち」という詩の一節がかかげられている。ということは、花田清輝も、中野重治が世の中の「歎き」や「不幸」に大変敏感な詩人であるということを認めていたことを示している。そういえば、「その人たち」には、世の中の「歎き」や「不幸」に敏感で、何よりもそれをうたうことで詩人たり得た、「塵労の詩人」・中野重治の真骨頂がみごとにあらわれていると私は思う。

「日本共産党創立二十五周年記念の夕に」という副題のつけられた「その人たち」という詩は、≪そのい言いようもない人びとについてわたしは語りたい／党をまわりから支えた人びと／まわりからと言おうか　なかからと言おうか≫と、口ごもるような調子でうたいだされている。おそらく、「その人たち」が戦争中になめて来なければならなかった塵労のつらさ、にがさを思いやるならば、それに敏感であればあるほど、中野重治の口からは、詩の言葉がすらすらとは出てこなかったのにちがいない。この詩の言葉は、詩人の胸にこみあげてくる内的衝迫におし出されながら、喉をしめつける「歎き」や「不幸」によって、深い苦渋と悲しみとのひびきをおびている。ともかく、中野重治は、共産主義者の息子や娘をもったことでその親たちがなめねばならなかった「塵労」をわきにどけておいて、「日本共産党 創立二十五周年 記念」を祝う言葉をうたいあげ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

るなどということはできなかったのである。つまり、塵労の詩人・中野重治は、まず「その人たち」の「塵労」――世の中の「歎き」や「不幸」をうたうことを通してしか、共産党創立記念をうたう言葉を口にすることはできなかったのである。それは、いいかえれば、彼がほんとうに素樸な詩人であったということにほかならないのだが……。

その人びとは心から息子娘を愛していた
子供たちは正しいのだということを理論とは別の手段で信じていた

娘が娘であったために受けたテロルについてききながら
その母親が母親であるためにそれ以上話させることのできなかったその焼けるような皮膚の
いたみ
そして息子に手紙を書こうためいろはから手習いをはじめたその小づくえの上の豆ランプ

そういう母親の姿の一つとして、たとえば、小林多喜二の母の姿が、中野重治の脳裏に焼きつけられていたにちがいない。多喜二の母にかぎらず、共産主義者の息子、娘をもった多くの親たちは、≪子供たちは正しいのだということを理論とは別の手段で信じていた≫であろうが、そういう人々の胸中で、≪やがてはそうなるであろう／しかしなるであろうか／しかしなるであろ

う》という確信ととまどいの間を切なく揺れ動く思いが、心臓をえぐるように渦巻いたにちがいない。

こういう子を持たぬ親たちに決してわかることのなかった愛で子供たちを包みながら
共産主義者の受けたのとは別な　共産主義者の親であるものとしての迫害に堪えたその人たち
そして息子たちに先立たれさえし　白髪となり
いまは墓のなかへと行ったその人たち
そして死に行きながらも　子供たちとその党とへの愛において不屈であったその人たち
ああ　この登録されなかった人たちのためどんな切子に今夜灯を入れようか

戦争中、共産主義者の息子、娘をもった親たちは、つぎつぎに波のようにおおいかぶさって来る塵労の下敷きになりながら、口に出しては言えない苦悩と迫害とにたえて生きなければならなかったのである。そして、その言いようのない不幸の最中に倒れた人たちも少なくなかったのである。息子が転向すればしたで、その父親がまたどのような苦悩をなめねばならなかったかは、中野重治が『村の家』に描いているとおりである。そういえば、中野重治の父も、「いまは墓のなかへと行ったその人たち」の一人に数えられなければなるまい。「蟹シャボテンの花」というエ

ッセイで、中野重治は、≪自分の父は無学な一平民である。しかし決して頑迷な人間ではない。自然を踏みつぶす人間ではない。現世的快楽は微塵も持つてゐない敬愛すべき人の父である。父は子の為にすべてを尽し、自分の力に堪へない重荷をなほ甘受してゐる人間である。≫という中川一政の文章を引いて、それにつづけて、≪私の父はそういう父のひとりです。父は不幸の浪に老年期にはいってから襲われています。私自身も浪の一つとなって襲いかかっています。そうして父は、次ぎ次ぎと不幸におそわれた結果とうとうどんづまりへ来てしまい、その結果とうとう平等覚というようなことがわかってしまった、わかったというわけではないがわからずをえなくなってしまった、そういう意味で、彼をどんづまりへ追いこんで来た私ども子供たちこそ彼の救い親になっているのだなどと申します。口で言うばかりでなく、本当にもそう思っているらしい父に向かっては、私ではあっても彼の心理的閲歴などを訊くことはできません。いきおい私は、ますます観念的な孝行息子になって行くようです。≫と語っていたのである。

サヤ豆を育てたことについてかつて風が誇らなかったように
また船を浮べたことについてかつて水が求めなかったように
その信頼と愛とについて　報(むく)いはおろかそれらの認められることさえ求めなかった親であった人たち
この親であった人びとの墓にどの水をわたしたちがそそごうか

どのクチナシとヒオオギとを切ってこようか

「サヤ豆」と「風」、「船」と「水」とをくみ合わせたこの質樸な比喩は無類に美しい。おそらく、親の子に対する無償の「信頼と愛」とを、人間本来の自然な姿として、これほど素樸にうたうことのできた現代詩人は他にはいないのではあるまいか。《……どの水をわたしたちがそそごうか／どのクチナシとヒオオギとを切って来ようか》という言葉も、かざり気のない、民衆生活生えぬきのものだと思う。それが、共産主義者が、犠牲となって倒れた無名の親たちを哀悼する最高の言葉となっていると思う。このような言葉は、いわば民衆生活の塵労の中で磨かれて来たものにほかならない。そして、中野重治は、そういう言葉で、戦争中とくに共産主義の親たちが集中的になめねばならなかった塵労を思いやりながら、逆境にあって発揮される親と子との間の無償の「信頼と愛」とを、それに重ねて民衆と前衛党との間のあるべき姿とをきわめて素樸な美しさでうたいあげるのである。その美しさは、あたかも洗いざらしの竹細工か、つづら細工の編籠のような質樸でしなやかな手ざわりをたもっているといえるであろう。

二

「その人たち」で、中野重治は、共産党の創立記念を祝うのに、まず共産主義者の息子、娘をもったがゆえに、言い知れぬ塵労をなめつくさねばならなかった無名の親たちの犠牲を思いやっ

ている。そうすることが、まっとうな共産主義者のとるべき態度であり、まっとうな詩人のつとめであるというのが、中野重治の気持であったにちがいない。つまり、中野重治は、自分の思想と資質にきわめて忠実に「その人たち」をうたっているのである。

ところで、肉親たちの塵労を思いやってうたうという発想は、実は、中野重治の詩の出発点、原点にあったものにほかならない。「その人たち」にみられるような詩の発想の原点は、「塵労鈔」まで溯源できると私は考えている。すなわち、大正十年（一九二一）十二月、当時中野重治が在学中だった金沢の第四高等学校の「北辰会雑誌」に、「塵労鈔」と題して最初に発表された詩篇から、昭和二十二年（一九四七）七月、「アカハタ」に発表された「その人たち」までにいたるその詩作をつらぬく一本の線は、「塵労の詩」という線にほかならない。この一本の線は、けっして一直線に伸びているわけではないし、この線の奏でる音色は必ずしも一色ではない。つまり、詩人が遭遇しなければならなかった時代の激動は、その詩篇にも、さまざまな屈折と変化とをもたらさずにはいなかったのである。にもかかわらず、耳を傾けて聞くならば、その根底をつらぬいて流れているものは、塵労の詩の調べにほかならない。

さて、「塵労鈔」には、「妹におくるうた」三篇、「断章」一篇があつめられている。いずれも自分の肉親たち――妹・父・母をうたったものである。この中で、「塵労鈔」という題がふさわしいのは、「妹におくるうた」よりも、詩としてはより未熟な「断章」の方であろう。「断章」には、つぎのような断片的な詩が並べられている。

一

母はめまひにたふれ
父は冬を山に入る
やみこやる母をみとるは妹
冬ごもる父のたのしみは鉦

二

くろきかまどに坐り
風呂をたく母の細きおとがひ
肥え太りかつはよろめく
父のはだかの後姿のかなしや

三

炬燵にて酒をのむ父の
びんの髪の白さよ
さかづきをなめつつの給ふ
春来なばまたあふべし

四

かな多き妹の手紙よ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.